吉田有理　福島民報　連載コラム

圏外のアンテナ

［母の宅配便］の巻

　巡る季節に合わせて、宅配便が届く。そのときだけは「届いたよ！」と、電話する。１８才で上京して以来、それが母との約束だった。

　春は、山菜の煮物。夏は、ひき肉を炒めたシソ味噌。秋は、小名浜に揚がったサンマのやわらか煮。冬は、地場野菜たっぷりのけんちん汁の具……。わたしは都会に住みながら、素朴な郷土料理を、あたりまえのように口にしてきたのである。

　しかし、２０１１年の３月以降、その習慣がパタリと途絶えた。

　５月になって、久しぶりに届いた段ボールに詰まっていたのは、新聞の束だった。何を送ったらいいのか困り果てた母は、せめて、福島の現状を伝えようと考えたのだろう。

　それから何度となく、福島民報入りの段ボール箱を受け取った。

　昨年末の大掃除では、わたしはこの新聞の山を処分することができなかった。どこの国の出来事よりもホットなニュースで埋まった福島民報の束は、わたしの本棚の最上段に鎮座して、この１年を過ごしたのである。

　最近になって、新聞宅配便は影をひそめ、この秋は、２年ぶりにサンマ煮を、つづいて、五目おこわを、そして、いとこが収穫した梨を受け取った。

　狭い仕事場を占領していた古新聞の束は、来週の有価ゴミの回収に出そうと思う。

　でも、捨てても捨てられない思いがある。処分する場所は、見つからない。

=２０１２年１２月２０日掲載=

捨てられなかった、昨年の福島民報